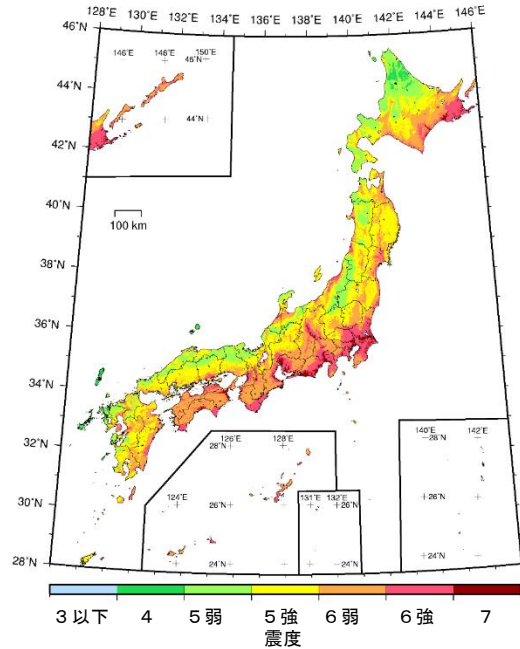


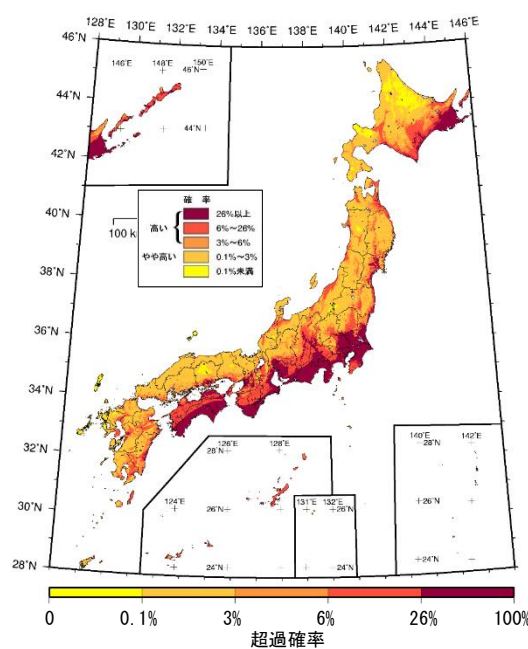
全国地震動予測地図 2018年版のポイント

1. 確率論的地震動予測地図

現時点で考慮し得るすべての地震の位置・規模・確率に基づき、各地点がどの程度の確率でどの程度揺れるのかをまとめて計算し、その分布を示した地図群。揺れの強さ、期間、確率のうち二つの値を固定して、残りを地図に示す。確率の評価基準日は2018年1月1日。



今後30年間にその値以上の揺れに見舞われる確率が3%となる震度/期間と確率を固定して震度を示した地図の例

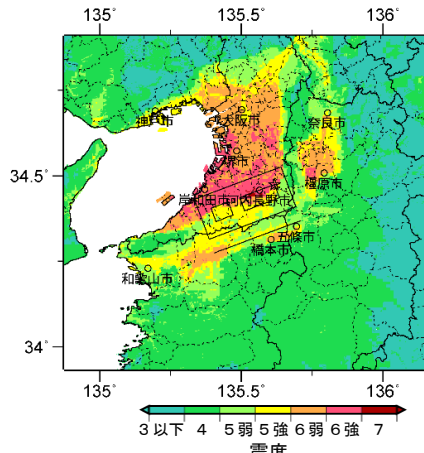


今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率/期間と揺れの強さを固定して確率を示した地図の例

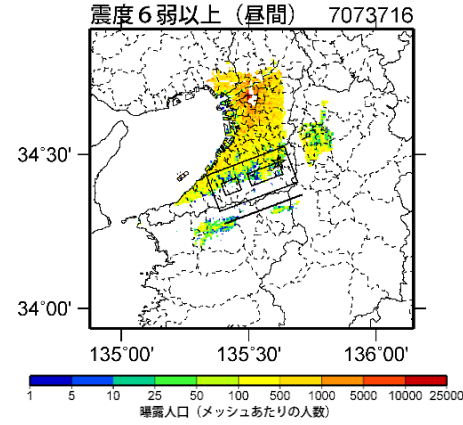
2. 震源断層を特定した地震動予測地図 (シナリオ地震動予測地図)

ある特定の震源断層において、地震が発生した場合に各地点がどのように揺れるのかを計算してその分布を示した地図。この地図を活用した例として、ある震度以上の揺れにさらされる人口の分布を示すものがある。

中央構造線断層帯五条谷区間が単独で活動する地震による地表震度分布の例(左)。同区間で発生する地震で震度6弱以上の揺れにさらされる人口の分布の例(右)。



(各図右肩数字は図域内の曝露人口総数)



3. 2018年版の特徴

2018年版で新たな長期評価結果を取り入れた。

- 千島海溝沿いの地震
- 四国地域の活断層
 - 中央構造線断層帯、そのほかの四国地域の活断層
- 九州地域の活断層の一部
 - 日出生(ひじう)断層帯
 - 万年山(はねやま)ー崩平山(くえのひらやま)断層帯

「今後30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率」の地図では、北海道南東部や仙台平野の一部、首都圏、東海～四国地域の太平洋側および糸魚川-静岡構造線断層帯の周辺地域などの確率が高い。なお、2017年版に比べて、以下の違いがある。

- (1) 北海道では、千島海溝沿いで発生するプレート間巨大地震および超巨大地震(17世紀型)を新たに評価したことによる確率の増加
- (2) 四国地域の活断層の評価結果による確率の違いは微小
- (3) 確率の評価基準日の変更に伴う年次更新で、確率がわずかに増加